

〈原著論文〉

運動指導者に対する研修の意義 ～産官学共同研究の取り組みから～

Value of Training for Exercise Leader
～From A joint Academy-Industry-Government Research Efforts～

岸本 みさ子¹

要旨

産官学共同研究の取り組みの一環として、運動指導者に対し子どもの発達特性やアプローチ方法に関する研修を実施した。研修受講後、指導者たちの指導法にどのような変化が現れたのかを明らかにし、指導対象者の発達特性を知ることの意義を検討した。その結果、子どもの発達特性やアプローチ方法を知ること、指導する際の意識や指導方法に変化が見られたことが明らかとなった。子どもの発達特性や子どもに対する指導法のポイントを学ぶことは指導の幅を広げることにつながり、有意義であるという結論を得た。今後は、保育・教育の専門家ではない指導者がその指導に関わる際、子どもの発達特性を学ぶ研修の実施が求められる。

キーワード：運動指導，研修，指導者，意識変化 産官学共同研究

Exercise instruction, Training, Leader, Change of consciousness,
A joint academy-industry-government research

I はじめに

子どもの体力・運動能力低下が課題とされ、体力・運動能力向上を目的とした様々な施策が実施されている。保育の現場でも体力・運動能力向上のための活動を重視しており、「運動あそび」などの活動を取り入れ、改善に力を入れているという現状がある。杉原ら（1999）は、運動あそびを行う際、体育指導員を導入している園と、導入していない園に通う子どもの体力・運動能力について調査を行った。その結果、体育指導員を導入していない園の子どもの方が体力・運動能力は高かったと報告している。その要因として、以下の三点が挙げられている。

- ①運動が一斉指導の形で指導されているため、説明を聞く時間や待ち時間が長く、実際の活動量が確保できていない。
- ②幼児期は多様な運動パターンとバリエーションを経験することが重要であるが、同じ運動の繰り返し中心で運動能力の発達にほとんど貢献していない。

③子どもがやりたいと思って取り組む活動ではなく、やらされている活動であることが多いため、運動に対する意欲が育たない。

子どもが主体的に進んで運動あそびをするような援助を行っている園では、多くの子どもたちが登園後、自分たちで工夫し、様々な運動に主体的に取り組む姿が観察されている。

要するに、子ども達の主体性が重要であり、個々が試行錯誤しながら自分の体を自分で動かす経験をすることが望ましいと言える。また、そのような活動を保障することができる保育者（指導者）の存在が重要であるともいえる。

それらの研究結果を踏まえ、千里金蘭大学とS市は、2016年度から「保育等で活用できる“身体づくりを促進するアプローチ方法”を提唱するための基礎研究」として、幼児期運動指針に基づき、保育者が無理なく持続可能であり、なおかつ子どもの「こころ」と「からだ」の変化を促進する活動を提唱するための基礎研究を連携・協力して実施している。この研究は、保育者が「運動あそびを通じた身体づくり」に対する理解を深め、子どもが

主体的に活動できるアプローチ方法を獲得し、実践に繋げることを目的としている。2017年度は保育現場で活用できるような「動きのサンプル集」(2017)を作成し、2018年度のはじめにS市の公立幼稚園・保育所に配布した。

これまで、作成したサンプル集を基に保育現場の保育者を対象に研修等を行ってきた。しかし、保育現場には保育者だけではなく、運動指導を専門とした指導者が介入することも多い。S市と千里金蘭大学が実践してきた内容を、運動指導を専門とした指導者に伝えることで、運動技術の指導ではなく、幼児期や学童期前半の発達特性に合わせた指導を考えるきっかけになるのではないかと考える。

2018年度からS市に本拠地を置くG大阪のジュニアサッカースクールコーチがS市立幼稚園・小学校にボール運動やサッカー指導を行う事業が開始されることに併せて、S市と千里金蘭大学がG大阪のジュニアサッカースクールコーチに対して研修を行う事業を開始した。

本研究では、運動指導者(サッカーコーチ)に対して、幼児期から学童期前半の子どもの特性等や発達段階に合わせたアプローチ方法に関する研修を行うことで、運動指導者(サッカーコーチ)が行う指導にどのような変化が現れるのかを明らかにし、研修実施の意義を明らかにすることを目的とする。

II 産官学共同研究の取組み

G(産)、S市(官)、千里金蘭大学(学)の3者は、2018年6月22日に「身体あそびを通した子どもの育ちに関する連携及び協力に関する覚書」を交わし、共同研究事業を開始した。

1. 目的

この連携の目的は、3者が緊密に連携及び協力しながら、身体あそびを通した子どもの育ちに関する取組を実践するとともに、広く情報発信することにより、子どもが健やかに育つまちづくりに寄与することとしている。

2. 共同研究連携協力事項

3者が取組む内容は大きく分類すると以下のとおりである。

(1) 身体あそびを通した子どもの育ちに係る研修

及びセミナー等の実施

(2) Gのジュニアサッカースクールコーチ(以下「コーチ」とする)に対して、研修等の実施

(3) コーチ研修後のインタビューやアンケート調査への協力

(4) 連携の取組みを基に、自発的に活動する子どもを増やすアプローチ方法に関する成果物の作成

3. 産官学共同研究の経緯

2018年度からS市の事業の一環として、公立幼稚園(認定こども園を含む)・小学校にGのコーチがサッカー指導に行くことになった背景がある。今まで、サッカースクールに通う子どもを対象として指導していたコーチが、保育現場や教育現場で指導するにあたり、子どもたちの現状や課題を知っておく必要があると考え、コーチ研修を実施することになった。このコーチ研修を通して、子どもに関する知識を蓄え、幼児期や学童期前半の特徴を押さえたアプローチ方法(指導法)を獲得することを目的としている。

(1) G派遣事業

GとS市はGと市民(小学生・園児)がふれあうことで、S市の新たな魅力であるGを身近に感じてもらい、S市をあげてGを応援する機運を盛り上げ、ホームタウンの意識や「Gのあるまち」としてのふるさと意識の醸成を図り、Gのプロコーチの指導のもと、サッカーやボール運動を通して身体を動かすことの楽しさを体感し、体力向上のきっかけを作ることを趣旨とし、市内の幼稚園・小学校でのボール運動やサッカーの指導に従事するという事業である。

平成30年度のコーチ派遣実施回数は、106回であった。内訳は、幼稚園59回、小学校47回であった。

実際に指導依頼があったのは、幼稚園13園、小学校18校であり、訪問回数は1回から多いところでは14回の指導が行われた。

4. 2018年度の産官学共同研究の取組み

産官学の連携により実施した取り組みは以下の3点である。

(1) 身体あそびを通した子どもの育ちに係る研修及びセミナー等の実施

「ココカラsuitableキッズセミナー」として、年

運動指導者に対する研修の意義

間11回実施した。対象者は、子どもに関わる仕事に従事している者とした。

実施内容は、表1に示した通りである。担当に関しては、産官学3者が行ったセミナーが3回、産官2者が行ったセミナーが1回、官学2者が行ったセミナーが1回、官単独で行ったセミナーが6回であった。

(2) コーチ研修等の実施

①2018年度の共同研究に先駆け、2018年3月にS市と千里金蘭大学主催のコーチ研修を実施した。

事前研修：2018年3月20日

【実施内容】

講義

・幼児期に必要とされる活動について

実技

・実際に保育現場で実施している運動あそびの体験

②2018年度産官学連携事業開始後は以下の通り3回実施した。

第1回：2018年7月10日

【実施内容】

実技

・ココカラsuitableキッズの取組主旨について
・アプローチ方法のアレンジ例を体験
・グループワークについて

第2回：2018年10月2日

【実施内容】

講義

・発育発達の特徴・仕掛学について

実技

・子どもがイメージしやすいアプローチ方法の検討
・ボールを使った運動あそびの体験
・伝える言葉の変換

第3回：2018年10月30日

【実施内容】

講義

・幼稚園、小学校での学びについて
・用語の定義
・学習指導要領
・幼児教育で大切にされていることについて

表1平成30年度産官学連携ココカラsuitableキッズセミナー年間実績

| NO | 開催日 | 内容 | S | 千里金蘭大学 | G |
|----|-----------|------------------------------|---|--------|---|
| ① | 7月31日(火) | 身体あそびで伸ばそう！ 子どもの力 | | | |
| | | 1) プロサッカークラブからみたジュニア期の現状 | ● | ● | ● |
| | | 2) 「こころ」と「からだ」の育ちについて | | | |
| | | 3) もっとやりたい！を引出すアプローチ方法 | | | |
| ② | 8月20日(月) | 身体あそびで伸ばそう！ 子どもの力 | | | |
| | | 1) 「こころ」と「からだ」の育ちについて | ● | ● | |
| | | 2) 背中ピンから始める体幹力アップのコツ | | | |
| ③ | 8月29日(水) | 身体あそびで伸ばそう！ 子どもの力 | | | |
| | | 1) プロサッカークラブからみたジュニア期の現状 | ● | | ● |
| | | 2) 用具なしでも楽しい身体あそび | | | |
| ④ | 9月5日(水) | 運動会も大丈夫！取組が楽しくなる身体あそび | ● | | |
| ⑤ | 10月15日(月) | 用具が無くても大丈夫！友達と楽しむ身体あそび | ● | | |
| ⑥ | 10月31日(水) | すぐに使える！姿勢保持につながる身体あそび | ● | | |
| ⑦ | 11月14日(水) | やる気につながる身体あそびのアプローチ | ● | | |
| ⑧ | 11月26日(月) | 1) やる気にスイッチを入れる“仕掛け” | | | |
| | | 2) 運動神経にスイッチを入れる“身体あそび” | ● | ● | ● |
| | | 3) 初めてでも大丈夫！サッカーを楽しもう | | | |
| ⑨ | 12月10日(月) | 跳び箱につながる身体あそび | ● | | |
| ⑩ | 1月30日(水) | ボール運動につながる“身体あそび” | ● | | |
| ⑪ | 2月18日(月) | 1) やる気にスイッチを入れる“仕掛け”Part2 | | | |
| | | 2) 運動神経にスイッチを入れる“身体あそび”Part2 | ● | ● | ● |
| | | 3) 身体あそび・体育授業におけるサッカーの活用 | | | |

実技

- ・ 幼小コーチ派遣の振返り
- ・ 身体の使い方・鬼ごっこに含まれる要素
- ・ 4人体制でのコーチング
- ・ 構成をマネジメントする
- ・ 連携をマネジメントする

当初は7月10日、9月4日、10月2日に実施予定であったが、9月4日は台風ため中止とし、10月30日に延期した。

(3) コーチ派遣への同行

平成30年度の幼稚園・小学校へのコーチ派遣は106回行われた。S市職員2名が106回中42回（幼稚園21回・小学校21回）、コーチ派遣現場に同行し、指導後に、コーチに対して振り返りと助言を行った。

Ⅲ コーチ研修に関する調査**1. コーチ研修を実施する意義****(1) コーチ研修の主旨**

子どもの特性や保育・教育現場の現状を把握したうえで子どもたちと関わり、サッカー指導をすることが重要であると考え、研修内容を検討した。

S市と千里金蘭大学の研修者は、サッカーの指導者ではない。S市の研修者は、子どもに関わる運動指導に従事している者である。故に、子どもに伝わるアプローチ方法に関する実技指導を実施した。また、千里金蘭大学は幼児期から学童期前半の子どもの発達特性や、保育・教育現場の学習内容や形態、更に子どもの現状についての研修を実施した。

(2) コーチ研修の意義

サッカースクールの子どものと公の保育・教育現場での子どもは、指導を受けるスタート段階での意識が全く違う。スクールに通う子どもは、サッカーに興味があり上手になりたいという気持ちがあってスクールに来る。しかし、保育・教育現場での一斉指導は、サッカーを習っている子ども、初めての子どもの、興味関心の有無、全てにおいて多様である。その中で、サッカースクールでの指導と同様の指導をすることはできない。それらのことを鑑み、子どもに関する知識を蓄えるための研修を実施し、子どもの特性や子どもを取り巻く環境などを理解することは大いに意義のあるものであると考える。

2. 目的

運動指導者は、運動指導に関する知識は豊富であるが、子どもの発達段階や、子どもを取り巻く環境の問題点等を深く学ぶ機会は少ないと考える。特に幼児期や学童期前半の子どもの運動指導は、子どもの発達段階を考慮しなければならない点も多く、個々への対応が重視されている。そのため、一斉に指導する際、指導が難しいと考えられる。子どもの特性を知ることにより、子どもに対するアプローチの方法の幅を広げることができ、指導しやすくなるのではないかと考える。

そこで本研究では、保育・教育現場にサッカー指導に行く指導者が、子どもに関する研修を受け、子どもの特性を理解することや、保育・教育現場の現状を知ることの意義を明らかにすることを目的とする。

3. 調査対象

Gジュニアサッカースクールコーチ19名を対象とした。年齢は20歳代67%、30歳代28%、40歳代5%であった。

また、指導経験年数は、5年未満が72%と最も高く、次いで6～10年・11～15年が11%、16年～20年が6%であった。

コーチの年齢や経験年数を見ると、若く経験年数が少ないコーチが多い傾向があるといえる。

4. 調査方法

コーチ研修を実施する際、研修前と研修後に毎回同様の質問紙調査を実施した。なお、研修最終日には、3回の研修を終えて調査したい内容を追加した質問紙調査を実施した。

(1) 研修前質問紙調査

研修前質問紙調査内容は以下の3点である。

- ①指導のおもしろさ、楽しさについて
- ②指導の難しさ、困っている点について
- ③指導する際に大切にしていること

これらの内容について、自由記述形式で回答を求めた。

(2) 研修後質問紙調査

研修後の質問紙調査内容は以下の通りである。

1. 研修に参加して

- ①理解しやすい内容だったと思う
- ②スクール等の中に取り入れやすい内容だと思う

- ③日々のスクール等を振り返るきっかけになったと思う
- ④これから、アプローチ方法を意識しようと思う
- ⑤実際に何か、試してみようと思う

という質問に対して、「全く思わない」「あまり思わない」「どちらでもない」「そう思う」「非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

また、

- ①研修に参加して印象に残ったこと
- ②研修に対する感想

という質問に対して自由記述形式で回答を求めた。

2. アプローチについて

- ①どの子どもみんなが楽しい！と感じる空間づくり
- ②声掛けのテンポと間
- ③少しの時間の積み重ね
- ④表情を豊かに
- ⑤声の強弱を意識
- ⑥みんなとアイコンタクト
- ⑦魔法の言葉「すごいやん！」

これらは、研修の中で研修者が提案している指導のポイントである。このポイントを実際にサッカー指導する際、どの程度意識し、できるようになっているのかを確認するため、「意識していない」「意識」「実行」「継続」「定着」の5件法で回答を求めた。

(3) 研修最終日の質問紙調査

平成30年度に実施した3回の研修を終えて、質問紙調査を行った。2回目までの調査に加え、以下の3点について質問した。

- ①3回目の研修を終えてご自身のコーチングについて変化の有無
- ②変化したと回答した人にはどのような変化があったのか
- ③3回のコーチ研修に対する感想や意見

について自由記述で回答を求めた。

今回の論文では、これらのアンケート調査の中から、研修の効果や意義を確認するために、研修最終日の質問紙の回答について分析を試みる。

5. 分析方法

質問紙調査の自由記述回答をテキストマイニングソフトであるKHcorder (2014) により、語彙頻度の分析を実施するとともに、共起ネットワーク

を作成し、語彙の前後でどのような表現がなされているのかを検討した。また、階層的クラスタ分析を行い、後の出現パターンが類似した語の組み合わせを抽出した。

階層的クラスタ分析では、最小出現語数を3に設定し、併合水準から4つのクラスタに分類した。共起ネットワークの作成は、最小出現語数2に設定した。その際、互いに強く結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示すサブグラフ検出 (random walks) を使用した。また、共起ネットワークを作成し、出現語数を2とし、Jaccard係数0.2以上に設定して分析した。

また、KJ法 (2008) を使用し、意味内容の類似した断片を集めてグループ化し、見出しの検討を行った。更に類似したグループをまとめ、抽象化するという作業を繰り返した。その結果を図式化した。分類については、健康・スポーツ科学系及び教育学系の研究者各1名で実施した。

6. 倫理的配慮

コーチに対しアンケート調査を実施するにあたり、コーチ研修の際に文書と口頭による説明を行った。調査への協力は任意であり、研究以外の目的には使用しないこと、調査協力の有無により利益不利益が生じることがないことなどを説明し、同意を得たコーチのみを対象とした。

IV 結果

1. 3回の研修を終えて、コーチングに変化を感じたか

この問いに回答したコーチは18名であった。変化したと回答したコーチが13名 (72%)、変化は感じないと回答したコーチが5名 (28%)、変化していないと回答したコーチが0名 (0%) であった。

2. 研修を経て変化したこと

調査によって得られた自由記述回答をテキストマイニング用のKHcorderソフトにより、語彙頻度の分析を行った。その結果、分析対象ファイルに含まれる全ての語 (総抽出語数) は、276 (使用語数118) 語、何種類の語含まれるかを示す異なり語数は132 (使用語数84) 語が抽出された。

上位の単語には「子ども」「指導」「動き」「メニュー」「意識」「感じる」「見る」「工夫」「声」「増

える」「多い」「段階」「分解」といった語が挙げられた。その他、出現する語とその出現回数は表2の通りである。

語の出現パターン類似した語の組み合わせを抽出する階層的クラスター分析を試みた結果、4つのクラスターに分類できた(表3)。クラスター1は子どもを見る頻度が多く感じる、クラスター2は動きの分解を行う、クラスター3は声を意識する、クラスター4は段階に応じてメニューを工夫して指導する、という結果となった。

表2 変化したことに類出する上位語

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|--------|------|------|------|
| 子ども | 7 | 仕方 | 1 |
| 指導 | 3 | 自身 | 1 |
| 動き | 3 | 自分 | 1 |
| メニュー | 2 | 惹く | 1 |
| 意識 | 2 | 手 | 1 |
| 感じる | 2 | 手法 | 1 |
| 見る | 2 | 周り | 1 |
| 工夫 | 2 | 巡回 | 1 |
| 声 | 2 | 少ない | 1 |
| 増える | 2 | 上手い | 1 |
| 多い | 2 | 身 | 1 |
| 段階 | 2 | 接す | 1 |
| 分解 | 2 | 説明 | 1 |
| アップ | 1 | 組み立て | 1 |
| イメージ | 1 | 対す | 1 |
| ジェスチャー | 1 | 遅れ | 1 |
| スクール | 1 | 適す | 1 |
| ステップ | 1 | 動物 | 1 |
| 一つ | 1 | 年代 | 1 |
| 引き出し | 1 | 発想 | 1 |
| 応じる | 1 | 反省 | 1 |
| 学ぶ | 1 | 必要 | 1 |
| 間 | 1 | 表れる | 1 |
| 関わり | 1 | 表情 | 1 |
| 機会 | 1 | 付き | 1 |
| 教える | 1 | 分ける | 1 |
| 興味 | 1 | 変化 | 1 |
| 現状 | 1 | 魔法 | 1 |
| 言い方 | 1 | 幼児 | 1 |
| 言葉 | 1 | 様子 | 1 |
| 考える | 1 | 抑揚 | 1 |
| 細かい | 1 | 良い | 1 |
| 作る | 1 | 例える | 1 |

表3 変化したことクラスター挿入

| クラスター1 | | クラスター3 | |
|--------|---|--------|---|
| 感じる | 2 | 意識 | 2 |
| 多い | 2 | 声 | 2 |
| 増える | 2 | | |
| 子ども | 7 | | |
| 見る | 2 | | |
| クラスター2 | | クラスター4 | |
| 動き | 3 | 指導 | 3 |
| 分解 | 2 | 工夫 | 2 |
| | | メニュー | 2 |
| | | 段階 | 2 |

共起ネットワークによる共起語を可視化した結果を図1に示した。強い共起関係ほど太い線で描画され、出現語が多い語ほど大きい円で描かれている。「子ども」という語の周りに「見る」「増える」「多い」「感じる」といった語が共起しており、更に「指導」という語も関連していた。「指導」という語には「工夫」「段階」「メニュー」という語や、「意識」「動き」「分解」といった語が共起していた。また、Jaccard係数0.2以上に設定した分析では、「子ども-見る-増える」「指導-動き・分解」「指導-メニュー-段階-工夫」「指導-意識・声」といった語に高い共起関係が示されていた(図2)。

変化した内容については、KJ法による分析も実施した。KJ法を用いた質的分析によって、研修を受けて変化した内容は、5つのカテゴリーに分類された。

分類されたカテゴリーを表4に示す。

変化した内容は、指導法に関する内容であり、「言

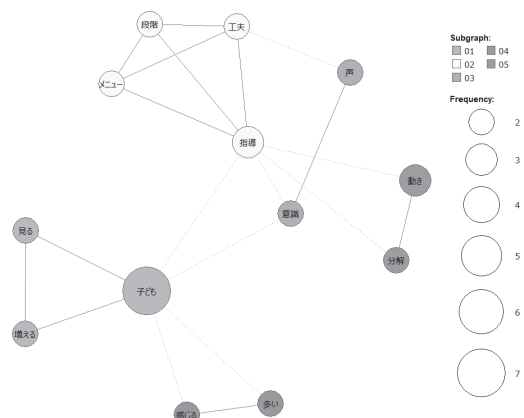


図1 共起ネットワーク (変化したこと)

V 考察

コーチ研修に参加して変化した内容や、研修後の感想から、子どもの発達特性や子どもへのアプローチ方法を知ることによって子どもを観察する機会が増え、指導方法を工夫するようになったという結果が確認できた。研修を通して、子どもの特性に合わせた指導方法が必要であることを再確認し、今まで以上に目の前の子どもを観察し、どのように声を掛けるのか、どのような場所に立って指導するのかといったことに注意を向けて指導するようになったと考えられる。指導を行う際、対象者の特性を理解し、指導計画を立てることが重要である。この結果から、子どもに関する研修を実施することは意義があったといえる。

吉田ら (2012) は、単なる運動指導の専門家ではなく、幼児の発達を理解した専門家が保育や教育の中に効果的に入ることができれば、幼児の運動あそびをより豊かにする一助になると同時に、その時間を共有する保育者や教師の力量を高めていくことにもつながるとしている。この指摘から考えても、サッカーコーチが、子どもの特性や指導法を学び、保育・教育の現場で指導することは有益であるといえる。また、吉田ら (2007) は、幼稚園で行われている運動指導の多くは体育専門の指導者が行っており、技術の向上を図ることが中心であることを懸念しており、幼児の運動発達の特徴を十分理解して動きたくするような環境を構成していくことが重要であるとしている。

子どもに関わる指導者は、指導する内容の専門

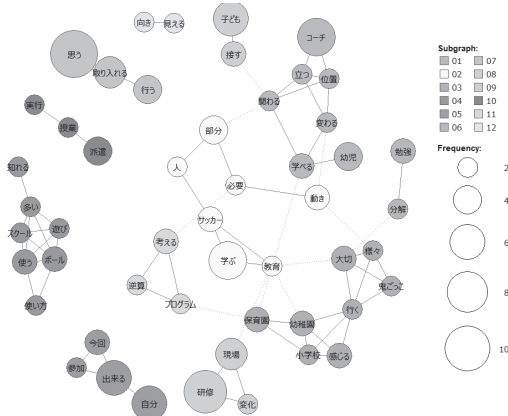


図3 共起ネットワーク (研修を通した学び)

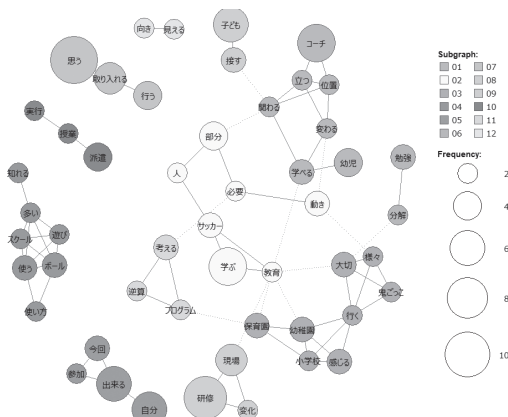


図4 共起ネットワーク (研修を通した学び)
Jaccard係数0.2以上挿入

表5 研修を通しての学びに頻出する上位語

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|-------|------|------|------|-------|------|-----|------|
| 思う | 11 | 部分 | 4 | 保育園 | 3 | 使い方 | 2 |
| 指導 | 11 | 幼児 | 4 | 幼稚園 | 3 | 事 | 2 |
| 研修 | 9 | 良い | 4 | あたり前 | 2 | 実行 | 2 |
| コーチ | 7 | サッカー | 3 | お願い | 2 | 授業 | 2 |
| 学ぶ | 7 | ボール | 3 | スクール | 2 | 小学校 | 2 |
| 子ども | 6 | 学べる | 3 | プログラム | 2 | 人 | 2 |
| 自分 | 6 | 感じる | 3 | 位置 | 2 | 多い | 2 |
| 出来る | 6 | 具体 | 3 | 関わる | 2 | 知れる | 2 |
| 現場 | 5 | 考える | 3 | 鬼ごっこ | 2 | 必要 | 2 |
| 取り入れる | 5 | 今回 | 3 | 逆算 | 2 | 分解 | 2 |
| 内容 | 5 | 使う | 3 | 教育 | 2 | 変わる | 2 |
| アプローチ | 4 | 接す | 3 | 見える | 2 | 変化 | 2 |
| メニュー | 4 | 大切 | 3 | 向き | 2 | 遊び | 2 |
| 行う | 4 | 動き | 3 | 行く | 2 | 様々 | 2 |
| 派遣 | 4 | 勉強 | 3 | 参加 | 2 | 立つ | 2 |

表6 研修を通しての学びクラスター挿入

| クラスター1 | | クラスター6 | | クラスター8 | |
|--------|---|--------|----|--------|----|
| 使う | 3 | 幼児 | 4 | 向き | 2 |
| ボール | 3 | 学べる | 3 | 見える | 2 |
| 遊び | 2 | メニュー | 4 | 実行 | 2 |
| スクール | 2 | 変わる | 2 | 派遣 | 4 |
| 多い | 2 | 部分 | 4 | 授業 | 2 |
| クラスター2 | | 人 | 2 | 考える | 3 |
| 大切 | 3 | サッカー | 3 | プログラム | 2 |
| 行く | 2 | 教育 | 2 | 逆算 | 2 |
| 鬼ごっこ | 2 | 学ぶ | 7 | 使い方 | 2 |
| 様々 | 2 | クラスター7 | | 思う | 11 |
| クラスター3 | | 指導 | 11 | 自分 | 6 |
| 保育園 | 3 | 変化 | 2 | 取り入れる | 5 |
| 感じる | 3 | 現場 | 5 | 行う | 4 |
| 幼稚園 | 3 | 研修 | 9 | 子ども | 6 |
| 小学校 | 2 | | | 接す | 3 |
| クラスター4 | | | | 良い | 4 |
| 関わる | 2 | | | 動き | 3 |
| コーチ | 7 | | | 必要 | 2 |
| 位置 | 2 | | | 勉強 | 3 |
| 立つ | 2 | | | 分解 | 2 |
| クラスター5 | | | | 内容 | 5 |
| 出来る | 6 | | | 具体 | 3 |
| 参加 | 2 | | | アプローチ | 4 |
| 今回 | 3 | | | 事 | 2 |
| | | | | 知れる | 2 |
| | | | | お願い | 2 |
| | | | | あたり前 | 2 |

性と共に、子どもの発達特性を理解して関わる事が重要であると考え。そのため、今後の課題として、保育・教育の専門家ではない指導者が、その指導に関わる際、子どもの発達特性を学ぶ機会が得られるよう、研修の実施が求められる。

本調査は、「身体あそびを通した子どもの育ち」をテーマに、「S市の子どもたちを元気にする活動」の一環として、産官学が連携し取り組んだ内容である。しかし今回は、サッカーコーチ限定の取り組みであり、かつ調査対象も少数であることが、本研究の限界であるため、今後は調査対象を様々な種目に広げて検討する必要がある。

VI 結論

1. 運動指導者が子どもの発達特性や指導方法を学ぶことで、指導する際の内容や方法に変化が

現れることが明らかとなった。

2. 子どもの発達特性や指導方法を学ぶことは有意義であるということが明らかとなった。

文献

- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析. ナカニシヤ出版.
- 川喜多二郎 (2008). 続・発想法 KJ法の展開と応用. 中公新書.
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩輝 (2011). 幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践介入. 平成20~22年度文部科学省学術研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 吹田市・千里金蘭大学 (2017). ココ(心)・カラ(体)はじめよう!動きのサンプル集.千里金蘭大学.

- 杉原隆・近藤充夫・森司朗・吉田伊津美 (1999).
幼児の運動能力判定基準と、園・家庭環境および遊びと運動発達の関係, 体育の科学, 49(5), 427-434
- 杉原隆・河邊貴子 (2014). 幼児期における運動発達と運動遊びの指導－遊びの中で子どもは育つ－. ミネルヴァ書房.
- 吉田伊津美・杉原隆・森司朗 (2007). 幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 58: 75-80
- 吉田伊津美・岩崎洋子 (2012). 幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識: 国公立幼稚園と私立幼稚園との比較, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 63(1): 107-113
- 牛澤賢二 (2018). やってみようテキストマイニング－自由回答アンケートの分析に挑戦!－. 朝倉書店.